

症併植移髄骨 与関分子定特

白血病治療に伴う骨髄移植の合併症のうち、半数以上が発症するといわれる急性移植片対宿主病（GVHD）の発症メカニズムを渋谷彰・筑波大教授のチームが動物実験で突き止め、19日発表した。【安味伸一】

筑波大が動物実験 発症防止の新療法

特定分子の働きを抑えることでGVHDを防げるため、骨髄提供を待つ血液がん患者と提供者（ドナー）との白血球型の一致度が多少異なっても移植成功の可能性が大きいという。チーム

は、リンパ球に存在する特定の分子（DNAM-1）がGVHD発症にかかわっていることを見つけた。

実験では、白血球の型が50%異なるマウスの間で骨髄移植を実施、重度のGVHDを発症させた。DNAM-1の働きを抑える抗体を1回投与すると、90日後の生存率は約80%に達し、投与しなかったマウスの約10%を大きく上回った。渋谷教授は「一つの分子を標的に絞った療法で、人間にも適用できる」と話す。